

- 1 . ついで主はモーセとアロンに告げて仰せられた。
- 2 . 「ある人のからだの皮膚にはれもの、あるいはかさぶた、
あるいは光る斑点がで、からだの皮膚でツアラアトの患部のようになったときは、
その人を、祭司アロンか、祭司である彼の子らのひとりのところに連れて来る。
- 3 . 祭司はそのからだの皮膚の患部を調べる。
その患部の毛が白く変わり、
その患部がそのからだの皮膚よりも深く見えているなら、それはツアラアトの患部である。
祭司はそれを調べ、彼を汚れていると宣言する。
- 4 . もしそのからだの皮膚の光る斑点が白くても、
皮膚よりも深くは見えず、そこの毛も白く変わっていないなら、祭司はその患者を七日間隔離する。
- 5 . 祭司は七日目に彼を調べる。
もしその患部が祭司の目に、そのままに見え、
患部が皮膚に広がっていないなら、祭司は彼をさらに七日間隔離する。
- 6 . 祭司は七日目に再び彼を調べる。
もし患部が薄れ、患部が皮膚に広がっていないなら、祭司は彼をきよいと宣言する。
それはかさぶたにすぎない。
彼は自分の衣服を洗う。彼はきよい。
- 7 . もし、その者が祭司のところに現われ、きよいと宣言されて後、
かさぶたが皮膚に広がってきたなら、再び祭司にその身を見せる。
- 8 . 祭司が調べて、かさぶたが皮膚に広がっているなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。
これはツアラアトである。
- 9 . ツアラアトの患部が人にあるときは、彼を祭司のところに連れて来る。
- 10 . 祭司が調べて、もし皮膚に白いはれものがあり、その毛も白く変わり、はれものに生肉が盛り上がっているなら、
- 11 . これは、そのからだの皮膚にある慢性のツアラアトである。
祭司は彼を汚れていると宣言する。
しかし祭司は彼を隔離する必要はない。
彼はすでに汚れているのだから。
- 12 . もしそのツアラアトがひどく皮膚に出て来て、
そのツアラアトが、その患者の皮膚全体、
すなわち祭司の目に留まるかぎり、頭から足までをおおっているときは、
- 13 . 祭司が調べる。
もしツアラアトが彼のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。
すべてが白く変わったので、彼はきよい。
- 14 . しかし生肉が彼に現われるときは、彼は汚れる。
- 15 . 祭司はその生肉を調べて、彼を汚れていると宣言する。
その生肉は汚れている。

それはツアラアトである。

- 16 . しかし、もしその生肉が再び白く変われば、彼は祭司のところに行く。
- 17 . 祭司は彼を調べる。
もしその患部が白く変わっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。
彼はきよい。
- 18 . また、人のからだの皮膚に腫物ができ、それがいやされたとき、
- 19 . その腫物の局所に白色のはれもの、または赤みがかった白い光る斑点があれば、祭司に見せる。
- 20 . 祭司が調べて、もしそれが皮膚よりも低く見え、
その毛が白く変わっていたなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。
それはその腫物に吹き出たツアラアトの患部である。
- 21 . もし祭司がこれを調べて、そこに白い毛がなく、
それが皮膚よりも低くなっておらず、それが薄れているなら、祭司はその者を七日間隔離する。
- 22 . もしそれが一段と皮膚に広がってくれば、祭司はこの者を汚れていると宣言する。
これは患部である。
- 23 . もしその光る斑点がもとのままであり、広がっていなければ、それはただ、できもののおとである。
祭司は彼をきよいと宣言する。
- 24 . あるいは、人のからだの皮膚にやけどがあって、
そのやけどの生肉が赤みがかった白色、または白色の光る斑点であれば、
- 25 . 祭司はこれを調べる。
もし光る斑点の上の毛が白く変わり、
それが皮膚よりも深く見えるなら、これはやけどに出て来たツアラアトである。
祭司はこの者を汚れていると宣言する。
それはツアラアトの患部である。
- 26 . 祭司がこれを調べて、その光る斑点到白い毛がなく、
それが皮膚よりも低くなっておらず、それが薄れているなら、祭司はその者を七日間隔離する。
- 27 . それから七日目に祭司が彼を調べる。
もしそれが一段と皮膚に広がっていれば、祭司はこの者を汚れていると宣言する。
これはツアラアトの患部である。
- 28 . もしその光る斑点がもとのままであり、
その皮膚に広がっておらず、それが薄れているなら、それはやけどによるはれものである。
祭司は彼をきよいと宣言する。
これはやけどのおとであるから。
- 29 . 男あるいは女で、頭か、ひげに疾患があるときは、
- 30 . 祭司はその患部を調べる。
もしそれが皮膚よりも深く見え、そこに細い黄色の毛があるなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。
これはかいせんで、頭またはひげのツアラアトである。
- 31 . 祭司がかいせんの患部を調べ、もしそれが皮膚よりも深く見えず、

- そこに黒い毛がないなら、祭司はそのかいせんの患者を七日間隔離する。
- 32 . 七日目に祭司は患部を調べる。
もしそのかいせんが広がらず、またそこに黄色い毛もなく、かいせんが皮膚よりも深く見えていないなら、
- 33 . その人は毛をそり落とす。
ただし、そのかいせんをそり落としてはならない。
祭司はそのかいせんの人を、さらに七日間隔離する。
- 34 . 七日目に祭司がそのかいせんを調べる。
もしかいせんが皮膚に広がっておらず、それが皮膚よりも深く見えていないなら、祭司は彼をきよいと宣言する。
彼は自分の衣服を洗う。彼はきよい。
- 35 . しかし、彼がきよいと宣言されて後に、もしも、そのかいせんが皮膚に広がったなら、
- 36 . 祭司は彼を調べる。
もしそのかいせんが皮膚に広がっていれば、祭司は黄色の毛を捜す必要はない。
彼は汚れている。
- 37 . もし祭司が見て、そのかいせんがもとのままであり、
黒い毛がそこに生えているなら、そのかいせんはいやされており、彼はきよい。
祭司は彼をきよいと宣言する。
- 38 . 男あるいは女で、そのからだの皮膚に光る斑点、すなわち白い光る斑点があるとき、
- 39 . 祭司はこれを調べる。
もしそのからだの皮膚にある光る斑点が、淡い白色であるなら、これは皮膚に出て来た湿疹である。
その者はきよい。
- 40 . 男の頭の毛が抜けても、それははげであって、その者はきよい。
- 41 . もし顔の生えざわから頭の毛が抜けても、それは額のはげであって、その者はきよい。
- 42 . もしその頭のはげか、額のはげに、
赤みがかかった白の患部があるなら、それは頭のはげに、あるいは額のはげに出て来たツアラアトである。
- 43 . 祭司は彼を調べる。
もしその頭のはげ、あるいは額のはげにある患部のはれものが、
からだの皮膚にあるツアラアトに見られるような赤みがかかった白色であれば、
- 44 . 彼はツアラアトの者であって汚れている。
祭司は彼を確かに汚れていると宣言する。
その患部が頭にあるからである。
- 45 . 患部のあるツアラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、
その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている。』と叫ばなければならない。
- 46 . その患部が彼にある間中、彼は汚れている。
彼は汚れているので、ひとりで住み、その住まいは宿営の外でなければならない。
- 47 . 衣服にツアラアトの患部が生じたときは、羊毛の衣服でも、亜麻布の衣服でも、
- 48 . 亜麻または羊毛の織物でも、編物でも、皮でも、また皮で作ったどんなものでも、
- 49 . 患部が緑がかっていたり、赤みを帯びたりしているなら、

衣服でも、皮でも、織物でも、編物でも、またどのような皮製品でも、それはツアラアトの患部である。
それを祭司に見せる。

50 . 祭司はその患部を調べる。

そして患部のある物を七日間隔離する。

51 . 七日目に彼はその患部のある物を調べる。

それが衣服でも、織物でも、編物でも、皮でも、また皮が何に用いられていても、
それらにその患部が広がっているときは、その患部は悪性のツアラアトで、それは汚れている。

52 . 羊毛製であるにしても、亜麻製であるにしても、衣服、

あるいは織物でも、編物でも、それがまたどんな皮製品でも、患部のある物は焼く。

これは悪性のツアラアトであるから、火で焼かなければならない。

53 . もし、祭司が調べて、その患部がその衣服に、あるいは織物、編物、またすべての皮製品に広がっていなければ、

54 . 祭司は命じて、その患部のある物を洗わせ、さらに七日間それを隔離する。

55 . 祭司は、その患部のある物が洗われて後に、調べる。

もし患部が変わったように見えなければ、その患部が広がっていても、それは汚れている。

それは火で焼かなければならない。

それが内側にあっても外側にあっても、それは腐食である。

56 . 祭司が調べて、もしそれが洗われて後、その患部が薄れていたならば、

彼はそれを衣服から、あるいは皮から、織物、編物から、ちぎり取る。

57 . もし再びその衣服に、あるいは織物、編物、またはどんな皮製品にも、それが現われたなら、それは再発である。

その患部のある物は火で焼かなければならない。

58 . しかし、洗った衣服は、

あるいは織物、編物、またはどんな皮製品でも、それらから、もし患部が消えていたら、再びこれを洗う。

それはきよい。」

59 . 以上は、羊毛あるいは亜麻布の衣服、織物、編物、

あるいはすべての皮製品のツアラアトの患部についてのおしえであり、

それをきよい、あるいは汚れている、と宣言するためである。

説教

神さまは、イスラエルが神さまに喜ばれる生き方をするようにと、11章以降で具体的に生活のあり方を指示なさいます。

「あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。

わたしが聖であるから。...

わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるから。

あなたがたは聖なる者となりなさい。

わたしが聖であるから。」(レビ記 11:44, 45)

それで、

11章では食生活に於ける汚れ、

12章では出産に於ける汚れ、

そして、13章、14章では人や建物、衣服に於ける汚れ(ツアラアト)、

15章では性器からの漏出物という汚れについて教えられ、その対処法が指示されます。

罪のためのいけにえより罪贖われ、

全焼のいけにえをささげて神さまへの献身を告白した者が、

和解のいけにえを食べて神さまとの交わりに迎え入れられ神と共に生きるようになるのですが、

その神と共に生きる「聖い生活」というものが具体的には食生活や出産に於ける汚れからのきよめということになります。

「あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。

わたしが聖であるから。...

あなたがたは聖なる者となりなさい。

わたしが聖であるから。」(レビ記 11:44, 45)

その答が、食生活をきよめ、出産をきよめ、産まれた子をきよめるということです。

今日の13章では「ツアラアト」について教えられます。

「ツアラアト"???"というの、もとのヘブル語そのままです。

これは長い間「らい病」と訳されてきました。

「ツアラアト」のギリシャ語訳「^{レブラ}」に由来すると思われます。

これが後に英語で「らい病」を意味する「leprosy」となりました。

でも、

「ツアラアト"???"の語源(「打つ、打撃」が語源で、「神さまに打たれる」の意味)や、具体的な症状の違い、

さらには「衣服のツアラアト」(レビ 13:47-59)、

「家のツアラアト」(レビ 14:33-53)という具合に

「かび」の意味で使われていることなども考え合わせると、

^{ミシユナ}
(ユダヤ教の口伝によると全部で72のタイプがある)、

単に「らい病(ハンセン病)」の訳語は不適切と思われます。

それでヘブル語そのままに「ツアラアト」となりました。

2-28 節では、人の皮膚にできたツアラアトについて教えられます。

「はれもの、かさぶた、あるいは光る斑点」(2)ができた場合にはツアラアトの疑いがあります。

それで、祭司の所に行って判別してもらうのですが、

その際、「患部の毛が白く変わり」(3,10)、「へこんで」いれば(3,20)、ツアラアトだと診断されます。

「光る斑点」の場合には、それが「皮膚に広がっている」ならツアラアトです(8)。

「毛も白く変わり」「白いはれもの」に「生肉が盛り上がっている」場合には「慢性のツアラアト」と診断されます。(10-11)

他に「腫れ物に吹き出たツアラアト」(20)があり、「やけどに出て来たツアラアト」(28)もあります。

29-37 節では「頭または髭のツアラアト」について、

40-46 節では「頭のハゲに出て来たツアラアト」について、

47-58 節では衣服のツアラアトについて、それぞれ教えられます。

いずれの際にも、疑いのある場合には七日の間隔離されます。

そして、七日目に見て患部が広がっていなければツアラアトではないと診断されて祭司により「きよい」と宣告されます。

しかし、「きよい」と宣告されても、

その後患部が広がっていけば、ツアラアトと診断されて「汚れている」と宣告されます。

ツアラアトと診断された場合には、祭司に「汚れている」と宣言されます。

その際、強制隔離されることはありませんが、「宿営の外」でひとりで住まなければなりません(46)。

そして、ツアラアトの者は、

「(葬式さながらに)自分の衣服を引き裂き、

その髪の毛を乱し、そして口ひげを覆って、

(誰かと接触して汚れを伝染しないよう、通りを歩く場合には)

『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない」のでした(45,46)。

つまり、ひとたび「ツアラアト」と診断されるや、

その人は肉体的に死に向かい、

のみならず人との交わりが許されず、社会的にも死んだような状態になったのです。

そのため、ツアラアトにかかった者は「生きた屍」と呼ばれました。

生きてはいても、事実上すでに死んだ者であったのです。

以上がツアラアトに関する規定です。

これを読んで考えさせられるのは、どうしてこんな規定があるのかということです。

神さまは、どうしてこのような教えを人間にお与えになったのでしょうか。

人間の病気なら他にもあるのに、どうして神さまはツアラアトだけを取り上げられたのでしょうか。

その理由として考えられるのは、

まず何より、その病が他の人に伝染するからということでしょう。

それで、それ以上に広がっていかないよう隔離したのです。

厳密に言うと、隔離はされませんが、

一般の人々とは厳格に区別されました。

そして、宗教的にも社会的にも事実上死んだ状態となり、

その上、最も残酷なことに、生ける屍と化して、生き恥を人前にさらしながら、生きていかねばならなかったのです。

そう考えると、

神さまはわざわざこのようなツアラアトの患者を、何かの目的でイスラエルの社会に存在させられたことになります。

その目的とは何でしょうか？

それは人類の罪の悲惨さを思い知らせるためではないでしょうか。

勿論、ツアラアトの患者が罪を犯してそうなったという意味ではありません。

なぜなら、彼らのみが罪深いのではなく、最初の間人アダムとエバから生まれた全人類が死に価するほど罪深いからです。

そして、罪の結果である神さまの呪いと悲惨と病を背負うことになりました。

思えば、これは 12 章も同様でした。

12 章は女性への「産みの苦しみ」という呪いを思い知らせるために、出産の際の対処法が規定されました。

そして、続くここ 13 章では、人類一般の罪の悲惨な現実を思い知らせるために、

見るも悲惨極まりない「ツアラアト」が、罪の最高の予型・モデルとして選ばれたと考えられます。

この 13 章での最大の焦点は、

ツアラアトという病気をしっかりと区別するという点です。

病気がどうかよくわからない、

曖昧なままその病巣がどんどんと広がり、

それが他の人にも伝染して、

遂には自分も他人も死に向かう、ということがないように、

病巣が小さい「斑点」のうちから、これは死に至る病であるということを判別しておく必要があるのです。

注目すべきは、この病巣が、自分で隠そうとしても隠しきれないという点です。

いっぺん消えても、また出て来ます。

たとえ消えても、無くなったわけではありません。

実は根深く陰湿に保菌しています。

そして、それがしばしば表面化するのです。

これが罪です。

私たちの罪の現実です。

そして、この罪の現実を私たちによくわからせるために、神さまは「ツアラアト」という病気を見せしめになさるのです。

それは神さまから私たち全人類に与えられたメッセージです。

「見よ、おまえたちはこのように罪深いのだ。」というメッセージです。

12章は「出産」という「産みの痛み」を通して、

そして、13章は「ツアラアト」という病を通して、

神さまは私たちがどんなに罪深い存在であるかを思い知らせてくださるのです。

このような罪に滅び行く現実の中で、私たちに救いはあるのでしょうか。

この問いの鍵は 12-13 節にあります。

12 . もしそのツアラアトがひどく皮膚に出て来て、

そのツアラアトが、その患者の皮膚全体、

すなわち祭司の目に留まるかぎり、頭から足までをおおっているときは、

13 . 祭司が調べる。

もしツアラアトが彼のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。

すべてが白く変わったので、彼はきよい。

これによると、

ツアラアトの症状が酷くなり、

病巣がどんどんと大きくなって、

遂には「その患者の皮膚全体、

すなわち祭司の目に留まるかぎり、

頭から足までをおおう」ようになり、

「彼のからだ全体をおおう」ようになったら、何と「祭司はその患者をきよいと宣言する」と言うのです。

どういうことでしょうか？

「ツアラアトが彼のからだ全体をおおう」とは、ツアラアトが全身を蝕んで肉体がもはや死に瀕しているということです。

そうなると、死ぬわけですから、神さまのもとに行く、すなわち神さまに受け容れられることになります。

だから、きよいのです。

つまり、病状が中途半端でなく、完全に悪化して、遂には死ぬようになると、「きよく」なるのです。

神が共におられるようになります。

神さまとの交わりが回復します。

神さまの前に「生きた」人となるのです。

全身ツアラアトに冒されて完全に死ぬ時、神さまの前には生きた者となるのです。

このことは、私たちの罪に関しても言えることです。

私たちが罪を隠し持っているうちは、実はまだ汚れています。

でも、その罪の病巣がどんどん大きくなって、遂にはそれが表面化し、

さらには着ている衣服では隠しきれなくなって、

とうとう全身を覆って、誰の目にも明らかになる時に、初めて神さまは「きよい」者と宣言してくださるのです。

自分が死ぬべき罪人だと自覚して告白する時、

つまり罪に完全に死んだ時に、初めて神さまは「きよい」者と宣言してくださるのです。

神さまとの交わりが回復します。

神が共におられるようになります。

聖い人となるのです。

そうして、神の前に「生きた」人となるのです。

これが自分を聖別するということです。

聖であるということです。

ここに集われたおひとりおひとりが、

日々、罪を悔い改めて、神が共におられる、きよい生活を生きていかれるよう、主の御名により祈ります。